



Title	インドネシア語話者と日本語母語話者の初対面の接触 場面会話における話題の研究ー日本語母語話者のプ ライバシーに関わる話題に注目してー
Author(s)	Sanjaya, Sonda
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101742
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (SANJAYA SONDA)

論文題名

インドネシア語話者と日本語母語話者の初対面の接触場面会話における話題の研究
—日本語母語話者のプライバシーに関わる話題に注目して—

論文内容の要旨

日本語を学習するインドネシア語話者は日本語をマスターする上で漢字や文法だけではなく、日本の文化とインドネシアの文化の理解、つまり、異文化理解の能力も不可欠である。異文化理解によって、インドネシア語話者と日本語母語話者の接触場面会話におけるコミュニケーションが円滑に行われ、より良い関係を構築することができる。そして、インドネシア語話者の日本語学習者がインドネシアと日本の文化を理解し、それを日本語での会話に適用できるようになるためには日本語教師の存在も重要である。例えば、接触場面においてどのような話題が適切であるか、また、初対面の日本語母語話者のプライバシーに関わる話題を避けるためにはどのようにすれば良いかを説明することで、日本語学習者が接触場面での会話を円滑に進めるための指導ができる。

本研究は初対面のインドネシア語話者と日本語母語話者の接触場面会話において、インドネシア語話者の日本語学習者が日本語母語話者のプライバシーを侵害しないようにするためには、どのように話題を取り上げれば良いか、また、日本語母語話者のプライバシーを侵害してしまった場合、その後に続くコミュニケーションをどのように円滑に進めれば良いかといったストラテジーを見出すことを目的とする。分析には、初対面のインドネシア語話者の日本語学習者と日本語母語話者の日本語によるロールプレイ会話をデータとして使用する。ロールプレイの実施方法については、調査開始前の計画では協力者に対面でロールプレイをやってもらおう予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で対面での実施が困難になったため、ZoomというWeb会議ツールを使用し遠隔で行った。ロールプレイの場面設定については、できる限り自然会話に近いデータを収集するために、予備調査を行い、その結果をもとに場面設定を行った。予備調査では、インドネシア語話者が初対面の日本語母語話者と会話を開始する際にどのような話題を取り上げるか、またインドネシア語話者が取り上げると想定される話題の中で日本語母語話者はどのような話題をプライバシーに関わる話題だと考えているかについて、インドネシア語話者と日本語母語話者にそれぞれ意識調査を行った。

ロールプレイの場面は、インドネシア語話者の日本語学習者と日本語母語話者の大学生がインドネシアの大学で開かれる文化交流会に参加する場面である「場面1」と、インドネシアの電車でインドネシア語話者の日本語学習者が日本語母語話者に話しかける「場面2」の2つの場面を設定した。これらの場面は、インドネシアでの日常会話で起こりうる会話場面であるということ、話者同士がテーマを想定してできる会話と突発的な電車の中での会話という異なる性質をもつ場面であること、初対面からその後も関係を続ける可能性のある相手かその場限りの相手かという性質が異なる場面を比較する必要があるということらを踏まえて設定した。

ロールプレイは日本語を学習しており日本語能力試験N3に相当する能力を持つインドネシアの大学の日本語教育学科・日本語学科に在籍している大学生のインドネシア語話者の日本語学習者と日本の大学に在籍している学部・研究科を問わず20～30代の大学生・大学院生の日本語母語話者に実施してもらった。同じくらいの年齢であれば、話題が合い円滑な会話をするのが容易だと考え、インドネシア語話者の日本語学習者と日本語母語話者をいずれも大学生に統一した。ロールプレイへの参加は、20名のインドネシア語話者と20名の日本語母語話者の調査協力者に依頼した。

話題選択に関する分析結果、母語やジェンダーの違いを問わず、場面1と場面2のいずれの場面においても、《個人的な情報》が最も多く取り上げられている話題のカテゴリーであったが、場面2においてはインドネシア語話者も日本語母語話者もこのカテゴリーを取り上げることを控えていることが明らかになった。また、いずれの場面でも、この《個人的な情報》のうちサブカテゴリー〈プロフィール〉が非常に多く取り上げられていた。また、日本語母語話者は、〈大学の生活・活動〉に関する話題をインドネシア語話者よりも多く取り上げていた。この結果から、日本語母語話者は自分と聞き手の個人的な情報に属する〈プロフィール〉に関する話題を控え、聞き手であるインドネシア語話者も自身と同じ学生であることから、相手との共通の話題である大学に係る話題を好むのではないかと考えられる。つまり、インドネシア語話者は自己開示したり、聞き手の個人的な情報を探ったりしながら関係を築こうとするが、日本語母語話者は自分のプライバシーを侵害されないようにし、聞き手のプライバシーにも入らないようにしようとする傾向があると考えられる。

日本語母語話者のプライバシーに関わる話題の出現の連鎖組織に関する分析の結果、日本語母語話者のプライバシーに関わる話題が出現する連鎖組織は5つのタイプに分けられた。「インドネシア語話者が日本語母語話者のプライバシーに触れて質問し、日本語母語話者が答える」（タイプ1）、「インドネシア語話者が日本語母語話者のプライバシーに触れて質問し、日本語母語話者が答える（日本語母語話者は直前でインドネシア語話者に同じ質問をして応答を得ている）」（タイプ2）、「インドネシア語話者が日本語母語話者のプライバシーに触れた質問をするが、日本語母語話者は答えない」（タイプ3）、「日本語母語話者のプライバシーに関することを自分から言う」（タイプ4）、「日本語母語話者のプライバシーに関することを自分から言う（日本語母語話者は直前でインドネシア語話者に同じ話題を質問して応答を得ている）」（タイプ5）の5つのタイプである。タイプ3の連鎖については、場面2でのみ見られた。

タイプ1においては場面1、2いずれにおいても、インドネシア語話者から日本語母語話者のプライバシーに関わる情報を尋ねられたらすぐ答えるというのが特徴として挙げられる。日本語母語話者が自分のプライバシーに関わる情報を提供する場合、いずれの場面でも日本語母語話者自ら情報を詳細に提供することや情報を追加することも見られた。場面2においては全てのケースで、日本語母語話者がインドネシア語話者から尋ねられたらすぐにインドネシア語話者に提供するというやりとりが見られた。これらの結果から、場面に関わらず、日本語母語話者のプライバシーに関わる情報をどの程度提供するかはプライバシーの度合いによると考えられる。

タイプ2は、場面1と場面2で少し結果が異なっていた。場面1においては、日本語母語話者が自分のプライバシーをインドネシア語話者から尋ねられたらすぐにプライバシーに関わる情報を提供していたのに対し、場面2においては、日本語母語話者が自分にとってプライバシーに関わる情報を先にインドネシア語話者に尋ね、その次の話題でインドネシア語話者が日本語母語話者に同じ情報を尋ねても日本語母語話者はすぐに情報提供するのではなく、保留（挿入連鎖がある）を示した後に情報提供していた。場面1と2で異なる特徴が見られたものの、このタイプで見られた断片では、日本語母語話者が自分にとってプライバシーの話題だと考えていながらも、日本語母語話者が先にその話題についてインドネシア語話者に質問しているため、インドネシア語話者からの同じ質問に日本語母語話者は答えないわけにはいかないため、日本語母語話者は情報提供をしたと考えられる。

タイプ3は、場面2の1組の女性同士の会話でのみで見られたため数が少なかったが、本調査の分析から、インドネシア語話者の質問に対して日本語母語話者は日本語母語話者のプライバシーに関わる情報を提供しないという結果が得られた。そして、日本語母語話者がインドネシア語話者に質問をしたり、質問する理由を確認したりすることで、インドネシア語話者の質問に対して日本語母語話者のプライバシーに関わる情報を提供せずに、話題を転換するという特徴が見られた。

タイプ4では、場面1、2いずれにおいても、直前の話題と関連があった。そして、話題を展開するために、日本語母語話者は直前の話題と関連のある自分にとってプライバシーに関わる情報を自己開示するという特徴が見られた。話題の関連性では場面1も2も共通しているが、連鎖組織を見ると異なる特徴が見られた。場面1では、日本語母語話者の情報提供（自己開示）により話題が開始され、インドネシア語話者が理解するまでの間に何度か情報確認があっても、日本語母語話者は途中で情報提供をやめることなく、情報を詳細に提供したり、追加したりすることで、自分のプライバシーに関わる情報を提供するという連鎖の特徴が見られた。一方、場面2ではこのような特徴は見られず、日本語母語話者が情報提供により自己開示した後、インドネシア語話者が情報の確認をすると、日本語母語話者が再び情報提供したということも、日本語母語話者が情報提供により自己開示した後、インドネシア語話者がそれに対して情報を確認したり、自分も自己開示したりしないということも見られた。

タイプ5は、場面においては1つ、場面2においては2つ見られた。日本語母語話者が自分にとってプライバシーに関わる情報を先にインドネシア語話者に質問し、その後、自己開示するという特徴が見られた。場面1においては、自己開示をした後もインドネシア語話者にプライバシーに関わる情報を尋ねられたり、確認されたりすると日本語母語話者が情報を提供するという連鎖が見られたが、場面2においては日本語母語話者による自己開示の後にはこのような連鎖は見られなかった。

以上の結果から、インドネシア語話者の日本語学習者が初対面の日本語母語話者のプライバシーに関わる話題になるべく触れないようにするための、あるいは、日本語母語話者のプライバシーに関わる話題に触れてしまった場合であっても会話をうまく続けるための戦略について考えてみたい。先行研究および本研究で得られた結果をもとに会話のやりとりの方法に関する戦略について以下にまとめる。

(1) 連鎖のタイプ1の応用

日本語母語話者に個人的な情報を自己開示をしてもらうようにするためには、いずれの場面においてもインドネシア語話者が日本語母語話者に情報要求をするなどして日本語母語話者のプライバシーに関わる話題を取りあげることは避け、インドネシア語話者がまず自分の個人情報を提供することにより日本語母語話者のプライバシーに関わる話題を取り上げる。

(2) 連鎖のタイプ2の応用

日本語母語話者が個人的な情報を先にインドネシア語話者に情報要求した場合、インドネシア語話者もそれと同じ個人的な情報を日本語母語話者に要求する機会が得られるため、そのタイミングで日本語母語話者に個人的な情報を要求する。

(3) 連鎖のタイプ 3 の応用

情報要求をしても、日本語母語話者が自分にとってプライバシーに関わる情報を提供しない場合は、その話題にとどまらず、個人情報に関わらない話題に転換する。

(4) 連鎖のタイプ 4 の応用

日本語母語話者が個人的な情報を自己開示すれば、インドネシア語話者がその情報に関して情報要求をする機会を得るため、その情報に関して情報を要求しても良い。

(5) 連鎖のタイプ 5 の応用

日本語母語話者が個人的な情報を先にインドネシア語話者に情報要求し、インドネシア語話者が答えした後、日本語母語話者も同じ話題について自己開示すれば、インドネシア語話者がその日本語母語話者の情報に関して情報要求をしても良い。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (SANJAYA SONDA)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	筒井 佐代
	副 査	教授	小森 万里
	副 査	教授	原 真由子
	副 査	准教授	櫻井 千穂
	副 査	准教授	高井 美穂

論文審査の結果の要旨

本論文は、インドネシア語話者の日本語学習者が初対面の日本語母語話者と会話をする際、相手のプライバシーを侵害しないようにするためにどのような話題を選択すれば良いか、またもしプライバシーを侵害してしまった場合、どのように会話を進めていけば良いかについて、ロールプレイデータを詳細に分析することを通して、日本語教育に応用できるストラテジーを見いだそうとした、実証的で意欲的な基礎研究である。先行研究では、日本語母語話者同士の初対面会話や、日本語と他言語の接触場面会話の話題選択に関する研究はいくつかあるものの、インドネシア語話者と日本語母語話者の初対面会話に関する研究はなく、またプライバシーに関わる話題に焦点をあてた研究で実際の会話を分析した研究も見られず、その点で新奇性があると言える。予備調査として、まずインドネシア語話者（IS）の日本語学習者に対して、日本語母語話者（JS）との会話で話したい話題についてアンケート調査を行い、その結果を用いて次はJSに対し、それらの話題のうちプライバシーに関わる話題がどれであるかを調査した。これらの意識調査に基づき、本調査では、ロールプレイを実施して、実際に会話を行った場合に現れる話題を分析している。分析に使用したデータは、ISとJSの女性同士、男性同士各10組、計20組による2種類の場面「場面1：インドネシアの大学で開かれているインドネシア・日本文化交流」「場面2：インドネシアの電車の中」のロールプレイをZoomで録画、録音し文字化したデータである。このデータについて、出現した話題に関する分析と、JSにとってのプライバシーに関わる話題が出現した箇所の連鎖組織に関する分析を行っている。

まず、出現した話題については、データ中の話題のすべてをカテゴリー化し、それぞれの話題を提示した話者について、場面1と場面2、ISとJS、女性と男性、ISの男女とJSの男女の区分によって、それぞれ量的な比較を行った。その結果、言語やジェンダーの違いを問わず、場面1と場面2のいずれにおいても《個人的な情報》が最も多く取り上げられていたが、場面2では1よりも控えられていたこと、両場面で《個人的な情報》のサブカテゴリー〈プロフィール〉が非常に多く取り上げられていたが、JSは〈大学の生活・活動〉に関する話題をISより多く取り上げていたことなどが指摘されている。このことから、JSは相手との共通の話題である〈大学の生活・活動〉を選択することで自分のプライバシーを侵害されないようにし、ISのプライバシーをも侵害しないようにしようとするが、ISは個人的な情報のやりとりによって関係を築こうとするのではないかと考察されている。

JSのプライバシーに関わる話題については、ロールプレイ後のフォローアップアンケートで、各JSに自己申告してもらっている。それらの話題の出現箇所の連鎖組織を分析した結果、以下の5つのタイプが観察された。タイプ1：ISがJSのプライバシーに触れて質問し、JSが答える、タイプ2：ISがJSのプライバシーに触れて質問し、JSが答える（JSは直前でJSに同じ質問をして応答を得ている）、タイプ3：ISがJSのプライバシーに触れた質問をするが、JSは答えない、タイプ4：JSのプライバシーに関することを自分から言う、タイプ5：JSのプライバシーに関することを自分から言う（JSは直前でISに同じ話題を質問して応答を得ている）。これらのタイプの分析結果として、タイプ1が最も多く見られ、JSはISの質問に対してすぐに情報を提供していたこと、タイプ2と5はJSが先にISに質問しており、自分にとってプライバシーでも話題として取り上げていること、タイプ3については場面2でのみ見られ、ISがSNSやインターネットアカウントを質問しており、JSは質問の理由を聞いたり話をはぐらかしたりして、答えていなかったこと、タイプ3以外ではこのような話題は見られず、プライバシーの程度がそれほど高くなかったと考えられること、自己開示の度合いは様々で、詳細な自己開示があれば、表層的な自己開示も見られたこと、プライバシーに関わる話題の前後の話題との関係を見ると、前の話題と関連する話題として提示される場合が多く、そのため開示しやすかったと考えら

れること、など、話題内容と連鎖組織、および前後の話題との関係について、詳細な分析がなされている。これらの分析結果から、日本語学習者への指導にあたって提示できるストラテジーが、話題の種類と会話のやりとりの両面から提案されており、後者は先行研究では示されていなかった、画期的な提案であると言える。

データからの話題の抽出とその数量をカテゴリー別にまとめるという膨大な作業と、連鎖組織の観点からプライバシーに関わる話題のやりとりを詳細に分析する作業を通して、接触場面における異文化コミュニケーションの問題点と指導上の解決策を論じた、大変意欲的で有用な研究であること、大部の論文でありながら論旨が一貫しており、図表を多く用いて読者の理解を容易にする工夫がなされていること、読みやすい日本語で書かれていることなど、論文の内容と形式において、高く評価できる力作である。また、申請者が研究分野に関する広範な知識と分析能力を有していることも明確に示されている。一方で、先行研究が十分に示されているとは言えないこと、連鎖組織の分析はより緻密にできた可能性があることなど、課題も残されている。しかし、それらの課題は、この論文の新奇性や独創性、継承性を損ねるものではない。

以上のことから、審査委員会は全員一致で、本論文が博士号を授与するにふさわしい研究であると判断した。